

〈出題〉

	大問名	設問	配点
01	漢字の読み書き	一	16点
02	論説文の読解	二	33点
03	小説文の読解	三	33点
04	古文の読解	四	18点

解説

一 漢字の読み書き

(1)「矛盾」と書き、二つの物事が食い違い、つじつまが合わないこと。です。(2)「容易」と書き、簡単にできるさま。という意味です。(3)「概念」と書き、ある物事がどういったものかということ、大まかにとらえた意味内容のことです。(4)「隅」と書き、「重箱の隅をつつく」で、非常に細かいことまで取りあげて、口うるさく言うこと。のたとえです。(5)「ぎょうし」と読み、目をこらして見つめること。です。(6)「がいう」と読み、当てはまること。です。(7)「なごり」と読み、別れるときに、思いきれない気持ちが残ること。・物事が過ぎ去ったあとに、なおその影響が残っていること。を意味します。(8)「とどこおる」と読み、物事がはかどらないこと。です。

二 論説文の読解

《出典》田島木綿子『クジラの歌を聴け』(山と溪谷社 二〇一三年)。
筆者は獣医学者。国立科学博物館動物研究部脊椎動物研究グループ研究主幹。筑波大学大学院生命環境科学研究科准教授。
一九七一年生まれ。著書に『海獣学者、クジラを解剖する。』などがあります。

*問題作成の都合上、文章を一部改変したところがあります。

問一 脱文中の「それ」が指す直前の内容は、何かが「太れる」ような状況について述べていることをつかましましょう。そのうえで、

第三・第四・第八段落が、アザラシの母親が子どもに与える「高脂肪の母乳」について述べていることに着目します。第四段落の最後は、その母乳がいかに高脂肪であるかを、「液体バターを飲んでいけるようなものである」と表現しているので、このあとに脱文が入ります。

問二 ズキンアザラシの授乳期間を表す数字です。ズキンアザラシについては、二つの A の間にある文章で説明しているのですが、ここに注目して読むと、ズキンアザラシの母親が子どもに高脂肪の母乳を与えることについて、「共に過ごす4日の間に……倍増させる」とあります。ここから、「4日」が、子どもに母乳を与える期間だということをおさえましょう。また、二つ目

の [A] の直前に「いざとなったら生後4日目でも海に潜ることができる」とありますが、これは、ズキンアザラシの子どもが、授乳を終えるころには、すでに一人で生き残る術を身につけているということを述べています。

問三 文頭の「これ」を「最大限の贈り物」と表現しているので、「これ」の指す内容をおさえましょう。直前では、ズキンアザラシの母親が「高脂肪の母乳」を子どもに与えることについて説明しているので、「贈り物」である「これ」とは、「高脂肪の母乳」のことです。また、「母親は早く離乳させる代わりに、……高脂肪の母乳を子どもに与え」・「短い期間しか一緒にいられない、……最大限の贈り物」という表現から、子どもに短い期間しか授乳できない分、できる限り高栄養な母乳を与えてあげingことを、「最大限の贈り物」と表現していることをつかみます。このことと、[a] が「子ども」の直前にくる表現であることをふまえ、「短い期間しか一緒にいられない」を入れましょう。さらに、「高脂肪の母乳によって、皮下脂肪を一気に増やす」・「皮下脂肪は栄養源になる……防寒対策としても大変重要」などの表現から、「高脂肪の母乳」が、子どもに「皮下脂肪」をつけさせるためだということをおさえましょう。

問四 [B] は、「脂肪分60%以上の母乳」がどれほど高脂肪であるかをわかりやすくするために、「ウシの乳」・「チーズ」・「バター」

を例に挙げていることをつかみましょう。答えはオ「たとえば」です。[C] は、「ズキンアザラシの子どもは、……戦略も身につけている」の「も」に着目しましょう。[C] の前で説明した、「高脂肪の母乳によって、皮下脂肪を一気に増やす」という戦略に加えて、「体色」などの、「一人で生き残るための戦略」も備えていると述べています。答えはイ「さらに」です。

問五 — 線②の直後の二文が「一人で生き残るための戦略」を具体的に説明しています。「天敵の目を欺く」ため、「氷上の環境に溶け込む」ような「体色」をしていること、体毛が「水をはじく」ため、「生後4日目でも海に潜ることができる」こと、この二点について述べている選択肢はイとウです。アは、これより前で説明している、〈母親と一緒にいる間の戦略〉であり、ズキンアザラシの子どもが備えている「一人で生き残るための戦略」ではないので不適切。エは、ズキンアザラシの子どもの体色が「溶け込む」のは、「氷上の環境」であり、「他の母子の間」ではないため不適切。オは、4日間の授乳で「物足りない個体」が「お乳を横取りする」ことがあると説明されていますが、「母親がいなくなる」と、……横取りする習性」があるわけではないので不適切です。

問六 (1) キリンの母乳に関する「割合」のことを指しています。キリンの母乳については、この前で「脂肪分をはじめとする栄養分はわずか23%、残り77%が水分」だと述べているので、この〈栄

養分が少なく、ほとんどが水分」という割合を表現した部分をさがしましょう。「キリンの母乳は……配分になった」が、その割合について述べています。(2)——線③の直後に「キリンの母乳に水分が多いのは、……由来する」とあることから、「乾燥した草原地帯に棲息している」ことが理由の一つであること、また、そのような地域では「寒さに耐えるための脂肪より、体を潤す水分の補給が重要」ということをおさえましょう。次の段落は「さらに」で始まっているので、この段落の内容もおさえます。ここでは、「キリンの授乳期間は……比較的長い」うえに「生後2週間ほどで、草を食べ始め、……一緒に過ごすことができる」ため、「高栄養なミルクで急激に成長する必要はない」と述べています。これらの内容をまとめましょう。この直後に、「そこで、キリンの母乳は……配分になった」とあることから、ここまでの内容が、キリンの母乳が「栄養分よりも、水分を優先」した割合になっている理由を述べているとわかります。

問七 保護した野生動物の子どもに対し、「どのようなミルクを与えたらよいのか」が課題になると説明したあと、「キリンのうちに……先決なのか」と述べているので、キリンの子どもに母乳を与えるうえで、重要なことをおさえます。キリンの子どもについて説明している文章に着目し、——線③のあとにある「キリンの子どもは……水分の補給が重要」などの表現をおさえましょう。

う。

問八 ——線④の直後の「それでも」に着目し、現状では〈経験や知見が少なく、それぞれの動物用のミルクが必ずしもあるわけではない〉ことが、対応が困難になる理由だということをつかみましょう。「野生動物の子どもが保護」された場合の困難さについては、仮にハナゴンドウの「子どもだけが生きており水族館で保護した場合」について、「どのようなミルクを与えたらよいのか」が課題になると述べているので、ここにも着目しましょう。続く文章から、そのようなことが課題になるのは、「初歩的な生態もわかっていないのが、野生動物の現状」であり、「動物によってミルクの成分は違う……ただ与えれば良いというわけではない」からだということをおさえましょう。これらの内容をふまえ、指定字数に合うように表現を抜き出しましょう。

問九 Eの前では、「初歩的な生態もわかっていないのが、野生動物の現状」であり、「動物によってミルクの成分は違う……与えれば良いというわけではない」と説明したうえで、「野生動物の子どもが保護されると、現場の対応は困難をきわめる」と述べています。このような状況での、「イルカ用ミルクが開発された」という情報なので、現場にとって救いになるような情報です。このことに合うのはイの「安心する」。他の選択肢では、〈困難な状況において救いとなる情報〉という内容に合いません。

三 小説文の読解

《出典》 岩井圭也『付き添うひと』(ポプラ社 二〇二二年)

筆者は小説家。一九八七年生まれ。主な著書に『永遠についての証明』・『夏の陰』・『生者のポエトリー』などがあります。

*問題作成の都合上、文章を一部改変したところがあります。

問一 リード文(＝本文の前に書かれているそれまでのあらすじ)

や冒頭の文から、オボロが、駿介と話をするために訪れた堀家で、亜佐子に「駿介の趣味や嗜好についての質問」をしているという状況をおさえましょう。亜佐子はその「質問」を遮って「これって関係あるんでしょうか」と言っているのです。「これ」は「駿介の趣味や嗜好についての質問」を指します。また、「これ、というのは」と尋ねたオボロに対し、亜佐子は「私たちが話すのも結構ですけど……説得してもらえませんか」と言っているのです。オボロが駿介と話すのではなく、自分に質問してばかりいることに不満を感じていることもおさえましょう。以上をふまえて、解答をまとめます。

問二 「呆氣に取られた」とは、驚きあきれたということです。直前の「早く……説得してもらえませんか」という亜佐子の発言に対する反応であり、直後に「引きこもりをやめさせるために来たわけではない」とあるので、亜佐子が〈見当違いなことをオボロ

に望んでいる〉ことに対して、驚きあきれているということです。続けてオボロは、「ぼくは駿介さんの代理人」・「ぼくは駿介さんの利益が最大になるよう動きます」と話していることをふまえ、〈オボロの仕事は駿介の代理人として駿介の利益が最大になるよう動くこと〉であるにもかかわらず、〈亜佐子がオボロに望んでいるのは駿介を部屋から出すこと〉だという二点をおさえて答えをまとめましょう。

問三 「途中で口をつぐんだ」・「とでも言いたかったのか」という表現に着目し、オボロが反感を抱くような内容であることをつかみましょう。Aは「そこをうまくやるのが」に続く表現ですが、直前のオボロと亜佐子のやり取りを確認すると、〈駿介が部屋から出るように説得してほしい〉と頼む亜佐子に対し、オボロが〈やり方が強引では反発を招く〉と言っているのです。「そこをうまくやるのが」は、〈反発を招かないようにうまく説得するのが〉といった意味の発言です。ここまでの亜佐子の発言や、あとの「だったらなおさら、先生に何とかしてもらわないと」からは、亜佐子が〈駿介を説得して部屋から出すこと〉がオボロの役目だと思っていることがわかりますから、「そこをうまくやるのが」に続くであろう亜佐子の言葉は、アの「先生の仕事でしょう」だと考えられます。他の選択肢は、〈オボロが反感を抱く内容〉・〈亜佐子は駿介を部屋から出すことをオボロの役目だと思っている〉

という二点に当てはまりません。

問四 ここまでの亜佐子とオボロのやり取りを確認しましょう。

亜佐子は「駿介の趣味や嗜好についての質問」を続けるオボロに「早く……説得してもらえませんか」と言い、「部屋から引っぱり出すことが目的ではない」と言うオボロに「部屋から出ないと話ができない……お願いします」と頭を下げています。このような様子から、〈駿介を部屋から出すためにとにかくオボロに動いてほしい〉という気持ちと、その気がないオボロに困惑し、焦る気持ちをつかみましょう。――線③の前では、「私にはどうしていいか……あの子を出してください」と再び頭を下げています。「拝み倒し」とあるように、亜佐子は必死です。このような状況で、オボロが「駿介さんの部屋に案内してもらえますか」と言ったので、自分の頼みを聞いてくれるのだと思った亜佐子は「ほっと」したのです。正解はウ。アは、「話すことをためらう」・「弁護士としての能力に不安を感じていた」、イは、「自分と世間話をするばかり」が不適切です。エの〈駿介の趣味について質問されることへの気まずさ〉は、本文からは読み取れません。オは、〈駿介と話さないと問題は解決しないのに、オボロがそのことを理解しない〉という内容が不適切です。

問五 駿介と話をしようとしたオボロに対し、駿介が一切答えてくれなかったことを知ったときの亜佐子の気持ちであり、「落胆、

失望」に続く表現であることをふまえましょう。また、「やつぱり」という言葉や、「こうなることを最初から予期していたかのような」という表現からは、亜佐子に〈駿介は話してはくれないだろう〉という気持ちがあつたことがわかるので、ウの「諦め」が適切です。他の選択肢は、〈亜佐子の予想どおり、駿介は話してくれなかった〉という状況に合いません。

問六 本文冒頭でオボロは、「駿介の趣味や嗜好について」亜佐子から明確な答えが返ってこないことで、「一向に理解が深まらない」と感じています。また、「彼が何を考えているか、……知らなければ動きがありません」と言っていることから、駿介のことを理解するために、情報収集に努めているということをおさえます。これをふまえ、――線④の前の、「少しでも正確に……想像したかった」という表現や、――線④直後の描写から、オボロが、SNSで誹謗中傷をした駿介のことを、少しでも正確に理解しようとしていることをつかみましょう。このあと、オボロは彰平に対しても駿介のことを尋ね、最後は「これ以上続けても有益な情報は得られない」と訪問を終えることにしています。正解はア。イは、「諦めそうになる気持ちを奮い立たせたかった」、ウは、「引きこもりをやめさせるための手がかりをつかめる」、エは、「自分の想像力の方が信頼できる」、オは、「駿介に誠意が通じる」が不適切です。

問七 〈虚を衝く〉とは、〈相手の弱点や無防備なところにつけこんで攻撃すること〉です。「オボロが来訪している旨を伝えているらしい」・「先生が今日来ることを忘れていたみたいで」などあることから、彰平が、オボロと対面することを予想していなかったことをつかみましょう。そこにオボロが自ら出向いてきたので、彰平が想定外のことになった様子を、——線⑤は表しています。

問八 駿介のことをのしる彰平と、そのような彰平を「たしなめよう」ともしない「亜佐子に対する不快感です。直後でオボロは、「じゃあ、……そんなことをしたと思う?」・「正解なんて訊いていない」と言っており、駿介が誹謗中傷をした理由について一緒に考えることを求めています。ここから、亜佐子と彰平が駿介の行動について理解する努力をせず、駿介を否定的にとらえるだけであることにオボロはいらだち、「不快感」を覚えたということをつかみましょう。その気持ちだが、直後で「この家を覆っている無理解さへの怒り」と表現されています。「沸点を越えた」は、〈今まで我慢していた感情が、限界に達した〉ということを比喩的に表現していますが、これが、——線⑥直後の「ふくらんでいく」からつながっていることもおさえましょう。

問九 アは、「駿介の唯一の理解者」が不適切。オボロは駿介を理解したいとは思っていますが、話すこともできていないので、「理

解者」とはいえませんが。イは、〈駿介を部屋から出してほしい〉とオボロに必死で頼む一方で、駿介の趣味や嗜好についてはまったく知らず、駿介をのしる彰平をたしなめようもしない亜佐子の人物像を正しくとらえています。ウは、「自分の生活に影響がない駿介の問題」が不適切。「学校同じなんで。……勘弁してほしい」と話しており、自分の生活への影響を心配しています。また、駿介の件には関心がありませんが、本文の描写からは、「利己的」とまではいえませんが。エは、本文が一貫してオボロよりの視点で描かれているので不適切。オは、「複雑な思いが、発言を通して描かれている」が不適切。「そんな方法が……知りたいですよ」・「この少年はいいたい、……思っていたのだろうか」・「しまった」など、オボロの気持ちは口に出されていません。また、彰平の気持ちは「複雑な思い」とまではいえませんが。

四 古文の読解

《出典》浅井了意『浮世物語』

『浮世物語』は、江戸時代前期の仮名草子。主人公浮世房の一代記を通して、当時の社会のありさまを描いています。

*問題作成の都合上、文章を一部改変したところがあります。

問一 「その書物」について述べており、「その書物」とは、通齋の

「聞書」を指していることをおさえましょう。そのうえで、通齋の聞書が、本文後半に出てくることに着目します。「聞書のはしに……仮名に書きて置きたる」とあることから、通齋の「聞書」が、「仮名」で書かれていたことをおさえます。

問二 歴史的仮名遣いの「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、語頭・助詞以外は「わ・い・う・え・お」に直すので、「ひ」を「い」に直します。また、ア段音＋「う」（ふ）は、オ段音＋「う」に直すので、「やう」を「よう」に直しましょう。

問三 浮世房は、通齋に「其方は学文よくさせられた……療治もよくめさると見えた（＝あなたはよく学問をされた……治療も上手になさるとみえた）」と言っており、これに続く言葉なので、通齋をはめる内容だということをつかみましょう。これに当てはまる選択肢は、オ「りっぱなことだ」だけです。ちなみに、通齋については冒頭で、「野夫医者」・「物も知らず、ただ聞書ばかりにて療治をする」と紹介していますから、浮世房の発言は、通齋をからかったものだと考えられます。

問四 浮世房の、「医学正伝は誰の作ぞ」という質問に対する答えであることから判断します。直後で「正伝は唐の……といふ人の作ぢや」と「正伝」を作った人の名前を答えていることにも着目しましょう。

問五 ——線④を含む発言が、「聞書のはしに……仮名に書きて置

きたるを思ひ出だして」という記述に続いていることに着目し、「ごうとくろうじん正でんをつくる」という聞書を思い出したため、——線④のように答えたのだということをおさえます。「ごうとくろうじん」は、『医学正伝』の作者である「恒徳老人」の名前を「仮名」で書いたもので、現代仮名遣いに直すと「ごうとくろうじん」です。これと「後藤九郎二郎」の読み「ごとうくろうじろう」が似ていることをつかみましょう。つまり、通齋は『医学正伝』の作者を聞書に書いていたことを思い出したものの、「恒徳老人」の名前を仮名書きにしていたため、そこから推測してよく似た日本人名を答えてしまったということです。

問六 アは、「世間からの評判はよかった」が、本文にない内容です。イは、「すぐれた医者であると信じて疑わなかった」が不適切。問三で触れたように、浮世房の「其方は学文よくさせられた……療治もよくめさるる」という発言は、通齋をからかったものだと考えられます。ウは、本文の内容に合います。通齋は医者であるにもかかわらず、『医学正伝』を見たことがなく、作者を聞いたことがある程度の知識しかありません。しかし、浮世房の質問に対し、「それこそ存じたれ（＝それは知っております）」と、当然『医学正伝』の作者を知っているかのように答えます。ところが、仮名で書いた「聞書」から推測したため、「後藤九郎二郎」という日本人名を答えてしまった、という話です。エは、「機

国

語

解答

二		
(7)	(4)	(1)
なごり	隅	矛盾
(8)	(5)	(2)
とどこおる	ぎょうし	容易
(6)	(3)	
がいとう	概念	

三

問九	問八				問七	問六										問四	問三			問二		
イ	b		a		水分	(2)										(1)	B	b a		イ		
	て	初	成	動		は	で	た	親	食	く	う	分	に	(例)	キ	ははじめ	オ	皮		ら	短
	い	歩	分	物		な	急	め	と	べ	、	え	の	棲	リ	栄	下	れ	い		問二	
	な	的	は	に		い	激	、	長	始	生	に	補	息	ン	養	脂	な	期			
	い	な	違	よ	か	に	高	く	め	後	、	給	し	は	終わり	イ	肪	い	間	4		
	生	う	っ	て	ら	成	栄	一	、	ま	授	が	て	乾	た	高	※問三は a・c すべて正解で得点。	し	問三			
	態	も	わ	ミ	。長	す	な	に	乳	な	期	重	要	る	し	配	脂	肪		一		
	わ	か	っ	ルク	る	必	ル	過	後	も	草	間	で	あ	め	た	分	の		緒	問四	
				ク	要	ク	す	母	を	長	る	水	域		イ・ウ	母	乳	に				
				の														い				

※問八は a・b
両方正解で得点。

※問六(1)ははじめと終わり両方正解で得点。
※問五は完全。
※問四は B・C
※問三は a・c すべて正解で得点。
※問二は完全。
※問一は完全。

※問八はa・b
両方正解で得点。

※問四はB・C
※問五は完全。
※問六(1)ははじめと終わり両方正解で得点。

四				
問六	問五	問三	問一	
ウ	で	(例)恒	オ	仮名
	書	徳	問四	
	い	老	a	
	て	人	正	問二
	い	の	伝	
	た	名	b	
		前	作	といけるよう
		を	者	
		仮	※問四はa・b両方正解で得点。	
		名		

三										
問九	問八	問六	問三	問二				問一		
イ	終わり	はじめ		す	の	が	が	大	で	(例)垂
	さ	こ	ア	こ	は	オ	仕	に	あ	佐
	へ	の	問七	と	駿	ボ	事	な	り	子
	の	家	ウ	だ	介	口	な	る	駿	が
イ	怒	を	オ	か	を	に	の	よ	介	答
	り	覆		ら	部	望	に	う	の	え
			ウ	。屋	か	で	垂	く	利	る
				出	ら	い	佐	こ	益	こ
イ					出	る	子	と	最	人

※問八ははじめと終わり
両方正解で得点。

四	三	二	一	合配点
問一〜六	問二〜九	問一・二	問一〜六(1)	各2点×8＝16点
各3点×6＝18点	各3点×7＝21点	各6点×2＝12点	各3点×6＝18点	6点
合計100点	18点	12点	16点	